

## 現代舞踊コンクール入賞後のダンス活動に関する研究

米澤麻佑子・寺山由美

### Study of the continuance of continuous dance activities of top-ranking modern dance competition dancers

YONEZAWA Mayuko and TERAYAMA Yumi

#### Abstract

This study focused on the nation-wide modern dance competition, and aimed to declare distinctions between the continuous and non-continuous dance activities, and turning points of the top-ranking dancers.

To accomplish this, current activities of the prize dancers were comprehended by the document investigation and hearing surveys. Additionally, the factors of the effects of their current dance activities were analyzed by the interviews with the dancers, the coaches, and the competition organizer, especially focusing on the 1<sup>st</sup> prize winner.

As a result, the following points were clarified.

- 1) After winning the prizes, the present states of prize dancers' activities were away from the world of the dance in Junior and Children Division. Especially, the ratio was remarkable in Children Division.
- 2) The turning points of the continuous and non-continuous activities dancers could be "awareness about competitions", "attitude to dance activity" and "a creative urge".
- 3) There were different considerations between coaches, competition organizers and retired dancers.

#### I. 緒言

日本には多くのジャンルの舞踊が存在し、その中に現代舞踊が存在する。現代舞踊のダンサーの多くが、若いうちから民間のダンススタジオにおいて、一芸を極めるために、指導者により密接な関係で技術向上に取り組む現状にある。また、レッスンの成果の確認としてコンクールがあり、多くの若手ダンサーがコンクールに参加し、認められることをきっかけとしてプロの道へ歩む者も多い。全国舞踊コンクールを主催する東京新聞によると、コンクールの目的として日本の舞踊芸術発展向上のため、次代を担う舞踊家の発掘育成を図る<sup>10)</sup>ということがあげられている。このようにコンクールは、未来を担うダンサーを育てることを目的としてお

り、プロへの登竜門<sup>11)</sup>とも言われているが、コンクールで高い評価を得たにも関わらず、ダンスの世界を離れる若手ダンサーが多くみられるのも現状である<sup>16)</sup>。これは、主催者側の意図と出場者側の意図にズレが生じている可能性があり、将来の舞踊界を考えると大きな問題である。中川(1995)はコンクールで入賞を果たしたが、その後舞踊界から消えていった者も多いことをあげ、コンクールは舞踊家としてのゴールではなくスタート点であり、舞踊家としての長い道程のひとつでしかない<sup>10)</sup>と述べている。また、舞踊コンクールは舞踊界の底辺を広げ、質の向上という二つの目的を果たしてきたが、コンクールに参加する人の姿勢によりマイナス面が出てくることも否定できない<sup>10)</sup>と

述べ、舞踊コンクールの功罪を指摘している。プロダンサーになるには厳しい条件と長い間の努力が必要であるため、舞踊家への登竜門であるコンクールは若いダンサーを鍛え、経験を積む場所であることに意義を見出すことが重要であると考えられる。これまで、宗宮（2008）により、コンクールを経験したダンサーとダンスとの関係に影響を及ぼす要因の特徴と傾向が明らかになっている<sup>9)</sup>。その中で、外的要因（人的環境要因、物理的環境要因）として指導者との関係、練習時間、コンクールという環境、学業との両立等、内的要因として体調不良、けが、体型への強いこだわり、ストレス等をあげており、内的要因と外的要因は密接した関係を持ち、ダンサーとダンスとの関係に影響を及ぼすとしている<sup>9)</sup>。宗宮により、上記のことが明らかになったが、コンクールを経験した多くのダンサーが受賞後ダンスの世界を離れているにも関わらず、本研究で扱うダンス活動の継続に関する研究は行われていない。また、コンクールに関する文献はダンサーの舞踊批評が多く、この問題に触れる者は少ない。本研究でこの問題を取り扱うことにより、受賞後のダンサーのダンス活動の現状から、今後ダンサー育成について検討する一つの資料となると考える。

そこで本研究では、全国舞踊コンクール現代舞踊部門を対象に、第一に、文献及び聞き取り調査から、過去20年のコンクール入賞者のダンス活動継続状況の現状を把握し、第二に、1位受賞者に注目し、ダンサー、指導者、コンクール主催者へのインタビュー調査より、ダンス活動継続に影響を及ぼす要因にみられる特徴の分析を通して、活動継続、非継続の分岐点を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. コンクール入賞者のダンス活動継続状況の調査

#### A. 研究の対象

本研究では、第37回から第59回東京新聞主催全国舞踊コンクール（1980～2002）に焦点をあてて調査を行う。対象として上記コンクールを選んだ理由は、日本で最も歴史があり、日本におけるコンクールのパイオニア的存在であることからである。また、現在と同様の部門分

けがなされた第37回～第59回（1980～2002）の現代舞踊シニア部（18歳以上）、ジュニア部（中・高校生）、児童部（小学生以下）の入賞者のべ1178名を対象とし、コンクール入賞後のダンス活動継続状況に関する調査を行った。

#### B. データの収集方法

コンクール記録、舞踊年鑑による文献調査によりデータを収集、不明なものに関しては民間ダンススタジオへの聞き取り調査、民間ダンススタジオ発表会資料により、過去の入賞者のダンス活動の現状に関する資料を収集した。

#### C. データの処理

入賞者の中でその後ダンス活動を継続していない者の人数から、第37回から第59回まで各回ごとにダンス活動を継続していない者の割合を算出した。

## 2. ダンス活動継続に影響を及ぼす要因の検討

まず、過去に全国規模の舞踊コンクールにおいて1位受賞経験があり、現在ダンス活動を継続していない者とダンス活動を継続している者それぞれに、インタビュー調査を行い、回答数の多いものの特徴として捉え、ダンス活動継続者、非継続者の相違点を比較する。次に、指導者とコンクール主催者にインタビュー調査を行い、ダンサーではない立場からみるダンス活動の継続について検討する。最後に相違点を検討し、ダンス活動継続に影響を及ぼす要因を明らかにする。

### A. 1位受賞者のダンス活動継続・非継続の要因検討

#### 1) 対象

本研究の対象者である7名は、本来最もプロダンサーになり得る立場にある全国コンクール第1位入賞経験者に限定した。対象者の概要について、今回の調査では、ダンサーのプライベートに踏み込んだ質問を行っているため、ダンサーの身元が明らかにならない配慮として、大まかな概要を掲載するに止まる。（対象者の所属スタジオについては、3名は同じスタジオに所属していた者だが、他の者はそれぞれ異なるスタジオに所属していた者である。）

<対象者>

全国規模の現代舞踊コンクールにおける第1位受賞経験者（10代から30代女性）

- ・現在ダンス活動を継続していない者 5 名 (元ダンサー A～E)

ダンサー A (20 代女性) : 調査日 2009 年 6 月 18 日

第 1 位受賞年齢 : 11 歳・ダンスを離れた年齢 : 20 歳 (第 1 位を複数回受賞)

ダンサー B (10 代女性) : 調査日 2009 年 7 月 10 日

第 1 位受賞年齢 : 12 歳・ダンスを離れた年齢 : 17 歳 (第 1 位を複数回受賞)

ダンサー C (20 代女性) : 調査日 2009 年 7 月 13 日

第 1 位受賞年齢 : 17 歳・ダンスを離れた年齢 : 18 歳

ダンサー D (20 代女性) : 調査日 2009 年 7 月 17 日

第 1 位受賞年齢 : 19 歳・ダンスを離れた年齢 : 19 歳

ダンサー E (30 代女性) : 調査日 2009 年 7 月 28 日

第 1 位受賞年齢 : 24 歳・ダンスを離れた年齢 : 27 歳

- ・現在もダンス活動を継続している者 2 名 (ダンサー F、G)

ダンサー F (20 代女性) : 調査日 2009 年 10 月 9 日

第 1 位受賞年齢 : 15 歳・年間約 6 本の公演に出演。自作作品も発表している。

ダンサー G (20 代女性) : 調査日 2009 年 10 月 10 日

第 1 位受賞年齢 : 14 歳・年間 6～8 本の公演に出演。自作作品も発表している。

## 2) 調査方法及び分析方法

本研究では質的調査の手法を用いダンス活動継続について検討するため、過去の 1 位受賞者にインタビュー調査を行う。条件に該当する者が少ないことから、対象者は少数である。当時自身が受けた指導や、コンクールや踊りに対する思い、人間関係等に関してより深い部分までを検討していくため、インタビュー調査を行う事が必要であると考えた。インタビュー時には IC レコーダーやビデオカメラを持参し、了解を得た上で収録しながら調査を実施する。それを基に録音したテープを起こし、口述内容に即して記述する。インタビューでの録音を逐語録

としてデータとし、回答数の多い特徴的な要因について、現在もダンス活動を継続している者、ダンス活動を継続していない者、両者の特徴を比較し、両者の相違点、活動継続の分岐点について検討した。

インタビュー時の主な質問内容は以下の通りである。

- ・当時受けていた指導について (練習時間、練習内容、練習形態等)
- ・自身をとりまく環境に関して (指導者、友人、周囲との関係、受験、等)
- ・コンクールでの目標、自身にとってのコンクールの位置づけ
- ・結果に対する自身の考え
- ・コンクール以外の舞台活動の場に関して
- ・コンクールを通して得たものは
- ・自身にとって踊りとは何であったか
- ・ダンスをやめた原因に関して

## B. ダンサーではない立場からみるダンス活動継続について検討

### 1) 対象

- ・指導者 1 名 (70 代女性 : 指導歴は約 40 年。全国舞踊コンクールでこれまで多くの上位入賞者を輩出しており、その成果が認められ松山バレエ団教育賞を受賞するなど社会的評価の高い指導者)
- ・東京新聞主催全国舞踊コンクール主催者 1 名 (東京新聞文化事業部)

### 2) 調査及び分析方法

1 位受賞者と同様にインタビュー調査を行い、インタビューでの録音を逐語録としてデータとし、特徴的と思われる発言に着目し、その発言を抽出する。1 位受賞者の発言とも対応させ、ダンサーではない立場からみるダンス活動の継続について検討した。

主な質問内容は以下に示す。

#### 指導者

- ・コンクールに向けた指導の際、重点をおいていることに関して
- ・生徒がコンクールに出るきっかけ
- ・コンクールの位置づけ、生徒の目標、結果に関して
- ・コンクールを通して生徒に教えたこと
- ・コンクールを経てどのような成長が理想であ

るか

- ・コンクール以外の舞台活動の機会に関して
- ・生徒がダンスをやめた原因に関して
- ・現在のコンクールシステムに関して

#### コンクール主催者

- ・コンクール開催のきっかけ、当時の社会的背景に関して
- ・コンクールの審査システムに関して（審査員の選定方法、審査分数、審査基準の有無等）
- ・コンクール開催の目的
- ・主催者の視点で若手ダンサーがコンクールに出場する意義をどう考えるか
- ・コンクール入賞者の多くがダンスをやめている現状に関して
- ・コンクールの理想と現実について

### Ⅲ. 結果及び考察

#### 1. コンクール入賞者のダンス活動継続状況

図1より、ダンス活動を継続していない者の割合を部門ごとに平均すると、シニア部では21%、ジュニア部では68%、児童部では74%がダンス活動を継続していないという結果が得られ、シニア部とジュニア部、児童部にはダンス活動継続率に大きな差異がみられた。

シニア部では、平均して約21%のダンサーがコンクールで入賞を果たした後、ダンス活動を継続していないという結果が得られたことから、シニア部で入賞を果たした者の多くはその後ダンス活動を継続しているといえ、シニア部に出場するダンサーは受賞後プロの舞踊家に

なっている傾向があるといえる。事実、過去のコンクール記録には現在舞踊界の第1線で活躍する現役ダンサーや振付家が名を連ねる。シニア部では、コンクールという場が自身を売り込む大きな機会、ステップアップの場となっるとも考えられ、コンクールで認められることをきっかけにダンサーや指導者の道へと歩み、継続して活動を行っていく者が多いことが推察された。

ジュニア部では、平均して約68%のダンサーがコンクールで受賞後、ダンス活動を継続していないという結果が得られた。このことからジュニア部で入賞を果たした者はその後7割近くの者がダンス活動を継続していないと認められた。受験や体型の悩みを抱える難しい時期であり、思春期ダンサーが抱える人間関係や体型の悩みがダンスに影響を与えることが報告されていることから<sup>15)</sup>、ジュニア期は思春期を迎える不安定な時期であり<sup>9)</sup>、この時期におけるコンクールでの様々な経験はその後のダンス活動継続に影響を与えるとも考えられる。また、コンクール指導者によると、生徒がダンスを離れる理由について、高校卒業後の大学受験、大学進学をきっかけにダンスを離れる者が多いとしており、ジュニア部で直面する進路選択はその後のダンス活動の継続に大きな影響を与えていることが指導者のインタビューからも推察された。

児童部においては、平均して約74%のダンサーがコンクールで入賞を果たした後、ダンス

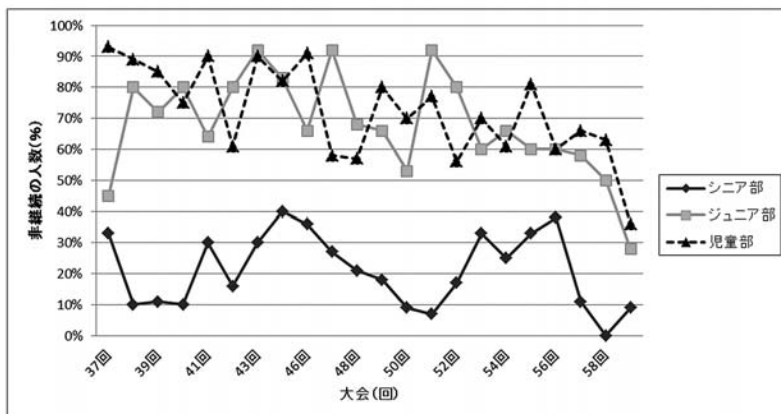


図1 過去のコンクール入賞者のダンス活動を継続していない者の割合

活動を継続していないという結果が得られたことから、児童部で入賞を果たした多くのダンサーがダンスの世界を離れているといえる。中には、幼稚園年長、小学校低学年の者も多くみられ、まだ踊りについてよく理解できないほど幼い頃から芸を厳しく叩きこまれ、コンクールを通して間違った舞踊観を植え付けられてしまう可能性も考えられる。また、自身で物事を考えられる年齢に達した際、踊る意味を見失ってしまいダンスを離れる者が多いことも推察された。このように、ジュニア部、児童部では多くがダンス活動を継続していないという結果から、ジュニア部、児童部とシニア部では、出場者のコンクール出場の目的が違うことが考えられ、その目標設定がダンサー育成に繋がらない可能性も示唆された。

## 2. ダンス活動継続に影響を及ぼす要因の検討

1位受賞者でダンス活動を継続していない5名、継続している2名へのインタビュー調査より得られた要因の中で回答数の多いものを特徴として捉え、継続していない者、継続している者の特徴を比較する。表1は両者の相違点を示したものである。( )は回答者数を示す。

1位受賞者にみられる要因の特徴は表1のように表わされた。ダンスの世界においては極めて母親の関与が強いことや、プロフェッショナル制度が確立していない日本のダンス界における経済的な問題も浮き彫りとなった。

1位受賞者にみられる特徴の中でも特にダンス活動継続に影響を及ぼしたとみられるものとして以下の3つをあげる。ダンス活動を継続していない者A～E、継続している者F、Gへのインタビュー調査より抜粋したものを掲載す

る。(番号は会話番号を示す)

「1位をとることだけが目標」「結果に対する強いこだわり」

- A37「とにかく1位って思って、目先のことに必死だったというか。でも続けるってやっぱりね。シニアになると無理だと思ったかも。」
- B41「最終的な目標というか、その時他の踊りをあんまり知らないので1位をとるために頑張っていました。」
- C31「私の中で前から1位とったらやめるって思ったからゴールに思ってたのかな？それで1位とれたから悔いなくやめられましたね。」
- D31「上位狙ってましたね～。だから絶対ミスできないって。失敗するところが怖くて、コンクール前とか失敗しそうな回転とかキープとか気持ち悪いくらい練習すごっていましたね。」
- E36「やっぱり1位とるためにすごい集中して頑張っていましたね。1位までなかなかいけなくて、1位とってみたいって強く思ってたんだよね。」
- F31「とりあえずコンクールやるからには1位になりたいじゃん？だから頑張ってた感じ。」
- F32「(コンクールは最終目標ではないということについて) うん！だってじゃなきゃ賞とって(継続しないと)意味ないじゃん。資格とかだってさ、使わなきゃ意味ないのと一緒。だと思っただよよね～。だからやめることは考えたことないですね。」
- G30「目標はまあコンクールだから順位が大事というか・・・コンクールで最終的に目指したのは1位ですよええ。やっぱり。それは目標でしたね。」
- G70「コンクールって本来そういう基礎を積む場？だと思いますから。ダンサーになるために集中的にトレーニングする場ですよ。」

両者共に、1位という目標を掲げ、コンクー

表1 1位受賞者にみられる要因の相違点

	ダンス活動を継続していない者	ダンス活動を継続している者
共通点	「1位を取ることだけが目標」(5名)	「結果に対する強いこだわり」(2名)
	「生活の中心がコンクール」(5名)	「生活の中心がコンクール」(2名)
	「母親の期待が大きい」(5名)	「母親の期待が大きい」(2名)
	「経済的負担」(3名)	「経済的負担」(2名)
異なる点	「舞台活動の機会がない」(3名)	「コンクールを通過点と捉える」(2名)
	「創作への苦手意識」(3名)	「公演参加の機会がある・他のスタジオのレッスンを受けている」(2名)
		「創作に対して苦手意識がない」(2名)
		「悩みを相談できる人がいた」(2名)

ルに取り組んでいたことが明らかになったが、ダンス活動を継続していない者は、本来通過点であるはずのコンクールでの入賞が最終目標となっていることや、1位受賞後もコンクール出場を続けた者に関しては、目標が達成され目的を失うケースや、1度頂点を極めた後、思うような結果が得られない場合、理想と現実のギャップからその後のダンス活動を断念してしまうことが示唆された。一方、ダンス活動を継続している者は、コンクールである以上結果にはこだわりを持つが、あくまでダンサーになるための通過点であるとコンクールを捉え、コンクールという場を正しく理解できていることが明らかになった。この意識の違いは、ダンス活動継続に大きな影響を与えるといえよう。

「舞台活動の機会がない」「舞台活動の機会がある・他のスタジオのレッスンを受けている」

- A50 「発表会とか、合同公演とか？あとは（舞台は）ないな～。 A先生も B先生もあんまり作品ださないしね」
- B53 「踊るのは発表会とかです。あと、アンコールとかでした。でも発表会は毎年じゃないので、やっぱり私の中でコンクールがメインでした。他に踊る機会もなかったの」
- D54 「コンクールに出ないってことは自然に踊る機会もなくなるってことだから」
- F41、42 「（留学経験）ものすごく影響受けた！あれがなかったら今やっていけないかも。今までと全然違うダンスを知れたっていうか、学べたのは大きくて、今まで習ってきたのしか知らなかったし、それでいいと思ってたんだけど。そうじゃだめなんだって思って。だから帰ってきてからもコンテ（コンテンポラリーダンス）のクラスも受けるようになったし。」
- G40、41 「シニアになってコンテとか見に行くようになって舞台って現舞だけじゃなくてこういう道もあるのね？って。（中略）狭い世界しか知らなかったから、今までは、で、他のレッスンも受けるようになりましたし。」
- G57 「自分から（オーディションや作品出品等）行くときもありますね。あとはお願いされてもあります」

インタビューより、コンクールという場が若手ダンサーにとって貴重な舞台活動の機会となっていたことが示唆された。ダンス活動を継続していない者は、指導者が引いたレールを歩

むまでは活動を継続できていても、受賞後自立した活動ができていない傾向があることが明らかになった。一方、ダンス活動を継続している者は、留学経験や、他のダンススタジオのレッスンを受ける等、一度は他のダンスの世界（師以外による学びの場）を経験していることが示唆された。コンクールという狭く画一的になりがちな環境で育ってきたダンサーにとってこの経験の差は大きく、ダンサーとしての道を歩むには常に向上心や広い視野を持ち、踊りの場が少ない現状でも積極的に踊る場を求める努力が必要であるということが示唆された。1位入賞を果たすほどの向上心を持つダンサーの、その後のダンス活動継続の分岐点は、ここにあるのではないかと考える。コンクールという場で育ったダンサーは、熱心に指導してくれる師が存在し、両親の理解もあり、経済的にも環境的にも恵まれているダンサーといえよう。しかし、恵まれているが故、開拓心のないダンサーが多いのも実情であり、良い環境が逆にダンサーとしての命を短くしているともいえ、継続、育成に繋がらない要因のひとつでもあるといえるのではないだろうか。

「創作に対して苦手意識がある」「創作に対して苦手意識がない」

- A80 「あ、（苦手意識）ありましたね。やったことないから。大人の時もどうやって作ったらいいか・・・それは思ったりしましたねえ。はい。シニアになったら自分でやんなきゃいけないじゃない？だから・・・うん。今まで踊ることしかやってきてないから、シニアに入って自分で振付しなきゃいけないって、やっぱりどう振付したらいいのかわかんなくて困ってた。どんな作品作ったら賞に入るのかもわかんなかったし。」
- C41 「シニアになったら自分で作んなきゃいけないじゃないですか？自分で作品作るって考えたら、自分には作れないって思っちゃったんですね。」
- D36 「振付できないもん。先生につくってもらえないと絶対できない気がするから」
- F49 「（創作への苦手意識）それはないなあ。作るのが好き。」
- G58 「苦手意識はなかったですね。向いてるかは分かんないけど楽しいです。電車の中とかぼーっと構考えたり妄想するのが好き。」

創作については、コンクールに出場するダンサーは、コンクールを通して技術、表現の向上を重点的に学んできたことにより、自身で自由に表現する術を身につけていない傾向があるといえる。活動を継続していない者は、創作に不安や苦手意識を持ち、思うように対応できない者が多いことが示唆されたが、ダンス活動を継続している者は、創作に対して苦手意識がなく、自身でも創作活動に励んでおり、作品を創作、発表することで踊る場も得ることができている。ダンスは創造性が必要とされるものであるため、この差は大きいと同時に、コンクールの稽古を通し、機械のように技術練習を重ねるだけではダンスにおいて大切な創造性が育たない可能性もある。このことは、コンクールに向けた稽古の問題点であると共に、ダンサーとしての仕事を待っているだけでは舞台活動の機会が少ないダンスの世界においては、作品を創作できる、できないということはその後のダンス活動の継続に影響を与えることが推察された。また、インタビューより、ダンス活動を継続していない者は、「踊りは厳しいもの」「窮屈なもの」「指導者に言われた通りに」と捉える等、ダンスの価値をコンクールで得た舞踊観で理解しており、コンクールの評価が踊りの全てであると捉える傾向にある。このことから、幼少よりコンクールに向けた厳しい指導を受けた者は、コンクールで賞をとるための踊りだけを捉え、指導者の意図とは別にコンクールを通して間違った舞踊観を得ている可能性が考えられる。コンクールという特殊な場におけるダンスのみを経験し、全国コンクールでの高い評価を受けたことで、ダンスの全てを理解したと勘違いしているとみられる者も多くみられ、コンクールの成績には向上心をみせるが、ダンサーとして成長するためには現状を変えようとせず、他のダンスを知らずにダンスの世界を離れてしまったと考えられる。この、コンクールを通して得た間違った舞踊観がダンス活動の継続に繋がらないことが示唆された。

一方、ダンス活動を継続している者は、コンクールでの経験、師以外の環境で学んだ経験も舞踊観に影響を与えていると考えられ、ダンサーとしてのレベルをさらに高めるため、または自身の踊る場を獲得するために積極的に取り

組む姿勢が推察された。また、ダンスはゴールのない世界であるとし、良いパフォーマンスのために自分を高めていくことの必要性を感じていることがうかがえた。その為に日々のトレーニングを行い、ダンサーとしての体づくりに励んでおり、妥協のない舞台に向けて努力を積んでいることが推察された。

### 3. ダンサー、指導者、コンクール主催者の立場からみるダンス活動の継続

1位受賞者、指導者、コンクール主催者へのインタビューより、現在ダンス活動を継続している者と、指導者、主催者の意識には違いが見られず、ダンス活動を継続している者は、コンクールという場をどのような場であるかを理解して出場していたことが示唆された。しかし、ダンス活動を継続していないダンサーと指導者、主催者には、意識の違いが生じていることが明らかになった。

指導者へのインタビュー調査より、コンクールで上位入賞者を多数輩出しているスタジオにおいても、コンクールを経てダンサーの道へ歩む者が極めて少ない現状が示唆された。

また、指導者とダンス活動を継続していないダンサーには以下のような意識の違いがみられた。

指導者「コンクールは通過点でしょ。だってこれからじゃない。そこからが大変なのよ。そこでそれ（コンクールで賞を）を争ってるうちはまだ、そこ（コンクール）の中だけの世界だけど」

指導者「結果を気にするから頑張ってるんじゃない。結果を気にしないなら出なきゃいい。子供に悲しい思いさせるならでないほうがいいとかいう親もいるけど、バネを教えるのがコンクール。落ちた時の悲しみ、苦しさ、受かった時の喜び、これを教えてくれるのがコンクールよ。1人だけ入らない子が次の年1位になる子もいるんだから。やるからには指導者は（賞を）狙ってると思うよ。」

指導者「（コンクールは）お互いに励み。目標があるのは励みになるから。1年の目標が立っているのは励みになるから。」

C31「私の中で前から1位とったらやめるって思ってたから、ゴールに思ってたのかな？それで1位とれたから悔いなくやめられましたね。」

D34「（ダンサーになることは）考えてないです。当時は身長小さいから、シニア行っても無理だと思ってたから」

E61「もうコンクールでも1位とれたし満足です。」

このように、ダンス活動を継続していない者はコンクールでの1位入賞をゴールであると捉えている者が多いことが明らかになった。指導者はコンクールという場である以上、結果を気にするのは当然とし、コンクールでは入賞を目的として指導を行っているとは回答したが、そこはあくまでダンサーとしての通過点であると考えていることが示唆された。しかし、ダンサーは、コンクールに向けた指導から「入賞を目的」としている部分だけをくみ取り、この目標設定がダンサー育成に繋がらない一つの原因であると考えている。

また、指導者は結果を通して、喜び、悔しさ等のバネを教えるのがコンクールであるとしているが、ダンス活動を継続していない者は思うようにいかない結果により、ダンスの道を諦めてしまう者が多い傾向にある。次のような発言もみられた。

指導者「はじめはある程度動きを矯正するの。本番あと何日かしかないって時に、それを自由にときはがすの。」

指導者「子供はね、メッキなんだからすぐ剥げちゃう。身につけてないのよ。だからはじめに叩きこんであとで解放してあげるの。」

指導者「こんなスパルタみたいに叩きながらさあ、やる時代でもないのに。だけでも、芸の世界は甘やかしちゃあやっぱしできないの。芸の世界は叩かれて育つのは、正しいって自分の信念でいたの」

A64「私の中で、踊り＝コンクールみたいな感じもあったかも。ダンスは競争みたいな。自分一番みたいな。」

B26「う～ん。ほんと嫌でしたね。いじめられてるみたいでしたね。」

B34「私も前はかなりやる気まんまんで頑張ってたんですけど、1位とかとって周りから1位って評価をもらえたのに、先生からは怒られて、できてないって言われて。」

B62「コンクールで練習のときとか、全部丁寧じゃなきゃいけないなくて、踊りはそういう風でなきゃいけないんだって思いました。先生に言われた通りにやらなきゃって、なんか窮屈で不自由さがありましたね」

「動きを矯正する」「芸の世界は叩かれて育つもの」等の発言からみられるように、コンクールにおける指導は非常に厳しいものであるといえる。しかし、ダンサーは「ダンスは競争」「い

じめられているよう」「自分ではできているつもりでもできていないと怒られる」等の回答がみられ、ダンサーは指導者の指導の意図を理解できていないといえる。まだ芸の厳しさについて理解できない幼いうちからコンクールに励むことにより、指導者が芸を極めるために必要と考える指導が、ダンサーにとっては辛く厳しいものでしかないといえらる傾向があり、指導者とダンサーの意識、舞踊観のズレを生んでしまう可能性もあるといえよう。

主催者とダンサーの意識のズレについても同様のことが言え、ダンサーはダンスの価値をコンクールで得た舞踊観で理解しているといえる。コンクールという場を指導者も主催者も通過点と捉えており、コンクールはダンサーとして成長するためのひとつのきっかけにすぎないといえよう。しかし、ダンサーは賞をとることに意義を見出しており、この意識の違いがダンス活動の継続に繋がらない一因であると推察された。

#### IV. 結論及び展望

本研究の結果から、以下の諸点が明らかになった。

- ①コンクール入賞者のダンス活動継続状況の現状は、シニア部 21%、ジュニア部 68%、児童部 74%が受賞後ダンスの世界を離れており、特に児童部ではその割合が顕著である。
- ②ダンス活動非継続者、継続者のダンス活動継続に影響を及ぼす要因の中で、特に活動継続の分岐点と考えられるものは、「コンクールに対する意識」「舞台活動に対する姿勢」「創作に対する意識」であると示唆された。
- ③ダンス活動非継続者と指導者、コンクール主催者には意識の違いが生じている。コンクールを通過点と捉え、継続を望む指導者、主催者に対して、ダンス活動非継続者は、賞をとることにコンクールの意義を見出しており、目標達成により、ダンス活動を継続しない者や、思うような結果が得られない場合、ダンスの道を諦めてしまう傾向がある。ダンス活動を継続していないダンサーは、ダンスの価値をコンクールで得た舞踊観で理解しているといえ、この意識の違いがダンス活動の継続に繋がらない一因と考えられる。



本研究の結果から、主催者や指導者は、ダンサーとしての道を歩むためにコンクールを設定しており、コンクールがダンサーの技術向上のために役立っていることは確かであるが、日本のダンス界の現状としては、コンクールでの入賞が、直結してダンサー育成には結びつかないということが推察された。また、受賞後ダンサーとしての経験を積むサポートがない現在のシステムでは、舞踊家としての道は保障されていないともいえる。

コンクールは、ダンスにおいては特殊な場であるため、競争に熱中するあまりダンサーにとってコンクールとはどのような場であるか、本来踊りとはどのようなものであるかを忘れてしまいがちである。ダンサーは、競うことがダンスの全てではないということを理解した上でコンクールに取り組み、自身を高めていくことが必要であろう。

これらのダンス活動継続に影響を及ぼす要因やコンクールを取り巻く舞踊界の現状が浮き彫りになったことで、今後ダンサー育成を検討する一つの手がかりになると考える。

#### 参考・引用文献

- 1) 阿江美恵子、掛水通子、雨ヶ崎俊子 (1997)、一流女性競技者の社会学的一考察 (1): 競技継続について. 日本体育学会第 48 回大会号、155.
- 2) 雨ヶ崎俊子、掛水通子、阿江美恵子 (1999)、競技スポーツ経験の人生に影響を及ぼす影響について. 日本体育学会第 50 回大会号、875.
- 3) Chartrand, J.M. and Lent, R.M (1987), sports counseling: Enhancing the development of the student-athlete. *Journal of Counseling and Development* 66, 164-167.
- 4) 原田奈名子 (1976)、現代日本における舞踊家のトレーニングに関する一考察. 昭和 51 年度筑波大学修士論文、茨城.
- 5) Ogilive, B.C. and Talor, J. (1993), career termination issues among elite athletes. *Handbook of research on sport psychology*, New York: Macmillian Publishing Company, 761-775.
- 6) 大場ゆかり、徳永幹雄 (2000)、競技引退の規定要因と競技引退に対する態度の関連. 日本体育学会第 51 回大会号、200.
- 7) 大場ゆかり・徳永幹雄 (2000)、アスリートの競技引退に関する研究の動向. *健康科学* 22、47-58.
- 8) Sinclair, D.A. and Orlick, T. (1993), Positive transitions from high-performance sport. *sport psychologist*, 7 (2): 138-150.
- 9) 宗宮悠子 (2008)、思春期におけるダンサーとダンスとの関係に影響を及ぼす要因. 平成 20 年度筑波大学卒業論文、茨城.
- 10) 東京新聞 (1995)、全国舞踊コンクール 50 年史. 東京新聞、東京.
- 11) 豊田則成、中込四郎 (1995)、運動選手の競技引退に関する研究: 自我同一性の再体制化をめぐる. *体育学研究* 41 (3)、192-206.
- 12) うらわまこと (2005)、舞踊コンクールの機能と運営. 社団法人全国国立文化施設協会芸術情報プラザ情報誌、17-18.
- 13) 全日本舞踊連合 (1990)、舞踊年鑑 15. 全日本舞踊連合、東京.
- 14) 全日本舞踊連合 (2000)、舞踊年鑑 25. 全日本舞踊連合、東京.
- 15) 全日本舞踊連合 (2007)、舞踊年鑑 32. 全日本舞踊連合、東京.
- 16) 全日本児童舞踊協会編 (2004)、日本の子どものダンスの歴史 - 児童舞踊年鑑 100 年史. 大修館書店、東京.